文化財見学シリーズ36
姫路市教育委員会文化部文化課（平成８年３月１日発行）
姫路市教育委員会文化課（平成18年３月31日増刷）

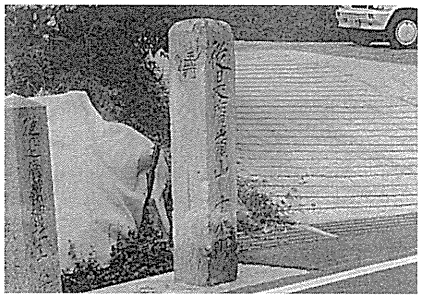
『広嶺山とその周辺』をたずねて

◀播磨名所巡覧図会
御田植祭の時の御田植囃子の様子を描いたもの。
左端の花傘は「カサバコ」と呼び、この傘が厄神（害虫）をとじこめる働きをし、それを本殿におくことによって虫封じが完成する。

広峯神社については、平安時代末期、後白河法皇撰の『梁塵秘抄』に「関より西なる軍神、一品中山、安芸なる厳島、備中なる吉備津宮、播磨に広峯、惣三所、淡路の石屋には住吉の宮」とあり、また南北朝時代の『峰相記』には「自国・他国歩を運んで崇敬すること、熊野の御嶽にもおとらず万人道をあらそいて参詣す」とある。古くから農業の神としても多くの人々の信仰を集めていた広峯神社は、姫路では代表的な文化財の多い神社である。広峯神社を訪ねると共に、麓の各所に点在する文化財も忘れずに訪ねてみよう。

広峯神社登山口の道標（白国五丁目）

広峯バス停から登山道に入るとすぐ３本の道標がある。２本は大正14年と昭和25年のもの。一番大きな道標は嘉永７年(1854)の年号と「従是廣嶺山十八丁」の文字と立派に彫られた将棋駒の「王将」と「角」の彫刻が刻まれている。道標の横には、生来将棋を好み遺言により将棋を刻んだ町石を奉納した旨のことが書かれ、姫路龍野町二丁目源助・善三郎の名がある。同様の町石が山頂の十八丁目にもある。

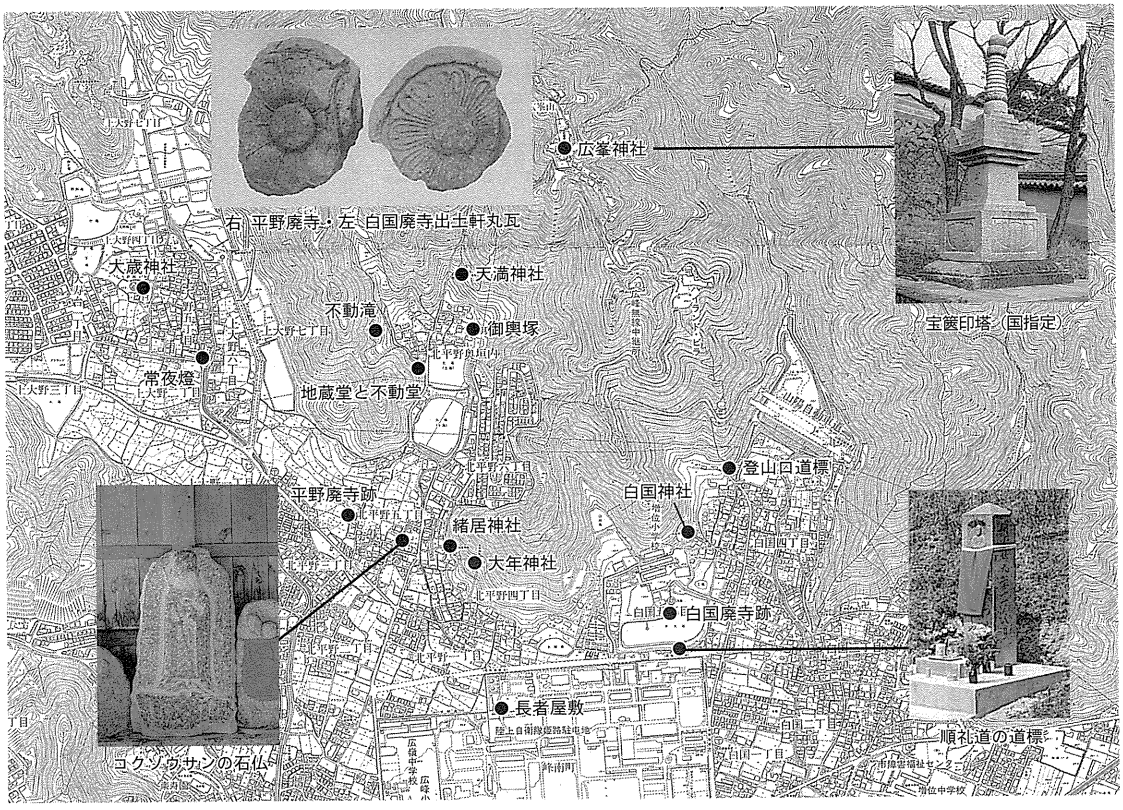


◀登山口の道標

広峯神社（広嶺山）

創建は崇神天皇頃と言い、神功皇后も白幣山に素盞嗚命を祭り戦勝祈願したと伝える。祭神は素盞嗚命・五十猛命・奇稲田姫、脚摩乳、手摩乳外８神。奈良時代の末天平５年(733)に吉備真備が唐から帰国の際、神託によって社殿を造営、牛頭天王を明石浦より勧請、広峯社と称したと言う。牛頭天王は異国の神であるが、荒神で素盞嗚命と同一視される。当社は鎌倉時代幕府の御家人となり大きな力をもち、京都祇園社の本社と称した。今の本殿は室町中期の建物で、拝殿は同時代のものを江戸初期に大修理した。

▲広峯神社 表門



広峯神社の文化財

〔国指定〕**本殿**　文安元年(1444)再建、正面11間側面４間という大きな建物、桧皮葺、内々陣は３社並列の形で神殿と仏間を備え天台系の神仏習合の形式を残している。

拝殿　正面10間という本殿にそくした幅の大きい建物、入母屋造本瓦葺、長床系の拝殿。

宝篋印塔　正面石段右手、室町時代初期のもの、高さ約２ｍ花崗岩製で全体が完備の良く形の整ったもの、白幣山から移築された。

〔県指定〕**広峯神社古文書**　鎌倉時代の源実朝の御教書や北条義時の下知状などがあり、コピーが拝殿に展示してある。

肥塚家古文書　社家の肥塚家に伝わる文書、鎌倉～江戸期の広峯神社の変遷を知る上に、貴重な史料。

宝珠図絵馬　室町期の文明17年(1485)の年号のある県下最古の絵馬。神具であり仏法具でもある宝珠を題材とし、神仏習合の有様を反映している。

〔市指定〕**表門**　江戸中期、鬼瓦に元禄10年(1697)の銘、複雑な彫刻などが少なくまとまりが良い。

摂社・末社11棟　荒神社(17Ｃ前半)・地養社(1687)・軍殿八幡社(1711)・天神社(1724)・大鬼社(1735)・庚申社(1751)・稲荷社(1761)・山王権現社(1777)・冠者殿社(19Ｃ初)・蛭子社(1848)・熊野権現社(1868)各年代別細分ができ、各様式技法がみられる。

御田植祭　(４月３日)穂揃式・走馬式(４月18日)いずれも市無形民俗文化財。御田植祭は拝殿下に仮田を作り田植の所作をし、穂揃式でその稲の生育状況から今年まく稲の品種を占う一連の神事である。

氏重刀　姫路手柄山鍛治の初代大和大掾氏重の作、明暦３年(1657)広峯神社へ奉納のため作刀したもの。(市美術館に寄託)

この外、江戸期の常夜燈や、平野川儀蔵の名を刻んだ力石、旧社家の山上集落跡などもある。

白国神社（白国五丁目）

延喜式神名帳にある飾東郡四座の一つ。播磨四の宮と云う。稲背入彦命を祖とする白国氏三代目阿層武命の妻高富姫がお産で苦しんだ時、神の加護により阿良都命を安産したと云う。そこで、この神（吾田津姫）を祭り“お産の神様”として崇敬している。境内に江戸期の石造品も多く、鳥居は享保２年(1717)の年号と「播州飾東郡国衙庄白国神社」の銘がある。手洗石は享保元年(1716)、六角型石燈籠は享保12年(1727)、常夜燈は寛政９年(1797)、拝殿前神燈は天保14年(1843)。また、右奥の境内社八幡神社は享保14年(1729)の建築でもと白国神社本殿を移築したものという。

▲白国神社

白国廃寺跡（白国五丁目）

白国神社南の弁天池一帯は、出土古瓦から奈良時代の寺跡とみられ、池中の弁天島は「堂の址」と云い塔跡と考えられる。『峰相記』に白国山麓に亀井寺ありと書かれ、山陰中納言建立とされている。中納言は元慶５年(881)播磨守兼補となったので、亀井寺は白国廃寺のあとに建立した寺であろう。

▲白国廃寺跡

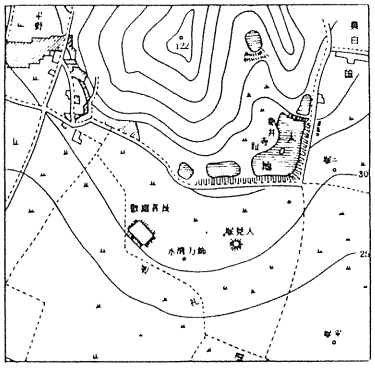
巡礼道の道標（白国五丁目）

以前、弁天池下を東西に巡礼道が通っていた。「右ほっけ山左しょしゃ山」(明29)の道しるべは、今その用を終え、路傍の地蔵として祀られている。

長者屋敷と人見塚（自衛隊構内）

古い地図を見ると、広嶺山の南に長者屋敷と人見塚の名が記されている。しかし、その位置は、戦前に軍用地となり、兵営建設のため姿を消し、今は自衛隊の構内となっている。『播磨鑑』の「飾間褐地染之由来」に、長者屋敷は往来の人を人見塚(人留の岡とも云う)で見つけ、宿泊をすすめ、夜半に石枕の上に寝かせ石を落として旅人を殺し財物を盗み、その血で布を染め、これを飾磨のかち染めと云ったという伝説がある。人見塚は明治30年に県の許可のもとに和田千吉氏が発掘を行った記録があり、円墳で、埴輪や朱のついた土器・紋様のある土器・曲玉・管玉・内行花文鏡などが出土した。埴輪は後ほど復元され二階造りの家形埴輪であると判った。

かちん染伝説の舞台



かちん染伝説関連地図（『考古界』第５篇第１号）

▲長者屋敷と人見塚

大年神社の力石（北平野四丁目）

境内に関羽石(通称力石)が集めてあり、その中の１個に、平野川儀蔵の名と明治25年の年号と45貫目(約170kg)の文字、もう１個にも同人の名と58貫目(約220kg)の重さが彫ってある。拝殿に享保３年(1718)の絵馬、入口の自然石燈籠に安政７年(1860)の年号と、この年は桜田門外の変が３月にあったが「天下泰平」の文字も彫られている。正面石段左手に一石五輪を一ヶ所に集め祀ってある。

▲大年神社の力石

織居神社の常夜燈（北平野四丁目）

大年神社の西方にある神社。南側道端の常夜燈は天保３年、(1832)の年号と印南郡神吉庄宮前村中の文字がある。

コクゾウサンと境内の石造品（北平野五丁目）

常称寺西側、公民館前にコクゾウサンと呼ぶお堂がある。堂内に北の大池から上ったと伝える木造虚空蔵菩薩像を祭る。堂左手には室町期のものとみえる石仏(阿弥陀２・地蔵３)があり、中央の地蔵像は高さ75㎝で、かすかに康安２年(1362)の年号が読みとれる。その隣には元文元年(1736)の年号のある六地蔵もある。また、入口右手には平野廃寺出土という礎石と近在の道標３本も保存してある。

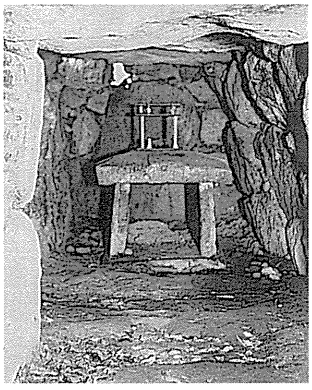
▲コクゾウサン境内の石造品

平野廃寺跡（北平野五丁目）

コクゾウサン西方約 150 ｍ辺りに奈良期創建の寺があったと伝える。かつて古瓦も出土、礎石もあったが、現在は宅地化が進み、寺跡はわからない。

御輿塚古墳（北平野奥垣内）県史跡

上池の西の道を奥まで進むと、路傍に御輿塚入口を示す石碑がある。コンクリート道に従って進むと古墳前に出る。直径15ｍ、高さ３ｍの円墳で南に開口部をもつ横穴式石室がある。奥行11.6ｍの石室内に高さ1.15ｍの組合式家形石棺を安置。『播磨鑑』や『名所巡覧図会』など江戸時代の書物にも記載され、古くから知られた古墳である。



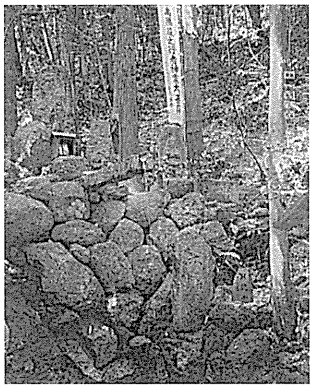
▲御輿塚古墳
（内部と石型石棺）

天満神社（北平野奥垣内）

広嶺山の北平野登山口にある。石鳥居は文政７年(1824)の年号と材木町住の石工居村茂十郎武義の名がある。また弘化３年(1846)の石段袖石と文政６年(1823)の常夜燈には、いずれも居村弥兵衛の名を刻んでいる。

不動滝と地蔵堂（北平野奥垣内）

上池西南隅の地蔵堂には、中央に地蔵像、側に一石五輪５個を祀ってある。すぐ北の不動滝入口に不動堂があり、中に不動像(絵)と役行者木像を祭っている。不動滝は修行場として開かれたもので100ｍ程入った所にある。更にその奥500ｍには妙見滝もあり、同じく修行場となっている。



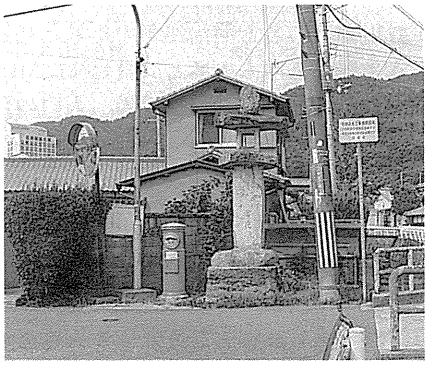
▲不動滝

上大野の常夜燈（上大野五丁目）

姫路独協大学入口の西方、上大野旧道沿いに自然石の大きな常夜燈がある。正面竿の部分に「天下泰平・国家安全」の文字が刻まれ、左横には嘉永五年子年二月(1852)の年号もある。江戸末期の諸外国との交渉に躍起になっていた当時の世相を示すものといえる。

大歳神社の石造品（上大野四丁目）

境内に江戸期の年号をもつ石造品が多い。鳥居は御影石製で風化が著しく判読しにくいが、天保14年(1843)の年号と石工毛野善之助・弥蔵の名がある。手洗石は弘化３年(1846)、御神燈は文化５年(1808)、本殿左手の住吉神社前の石燈籠は文化11年(1814)のものである。



▲上大野の常夜燈

■編集　糸 田 恒 雄　（姫路市文化財嘱託調査員）